

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：32622

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12184

研究課題名(和文)急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感のバーンアウトへの影響

研究課題名(英文) Influence of difficulties nurses experience in providing care for elderly patients with dementia in acute care hospitals on burnout

研究代表者

川村 晴美 (Kawamura, Harumi)

昭和大学・保健医療学部・講師

研究者番号：60769868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感がバーンアウトに与える影響を明らかにした。全国の200床以上の国公立系医療機関で14の急性期病院に勤務する看護師2032名を対象とし、自記式質問紙調査による横断研究を実施した。重回帰分析で最終選択された変数を観測変数として因果モデルを作成し、共分散構造分析にて適合度を検証した。有効回答数は1235名(60.8%)であった。急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感は、バーンアウトに直接的に影響し、陰性感情を介して間接的にも影響していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感を明らかにし、その現象を具体的に数値化する尺度を開発した。さらに、急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感がバーンアウトへ影響していることを明らかにした。看護師のバーンアウトを予防するため、認知症看護の困難感を対処すべく、認知症対応力向上の研修の工夫など認知症ケアの教育プログラムを構築する一助となったのではないかと考える。

研究成果の概要(英文)：This study aims to detail and identify the nurses' difficulties in dementia care in acute hospitals.

Study participants were 2,032 nurses working in 14 public and national acute hospitals with more than 200 beds nationwide in Japan. Study design is a cross-sectional study using a self-rating questionnaire. Using the variables finally selected by a multiple regression analysis as observation variables, a causal model was created, and the goodness of fit was verified by the covariance structure analysis. In total 1,235 responses (60.8%) were determined as valid. The dementia care difficulties directly affected burnout of nurses providing dementia care for older patients and the difficulties indirectly affected burnout through negative feelings.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症高齢者 困難感 バーンアウト 看護師 急性期病院

1. 研究開始当初の背景

わが国は高齢社会の進展により、認知症高齢者が身体疾患の治療のために、急性期病院に入院する機会が増加し、2014年の調査では、認知症あるいは認知機能低下の入院割合は29.8%と増えてきている。認知症高齢者は身体疾患のため病院に入院することで、混乱・不穏などを起こし、認知症高齢者をケアする看護師には、さまざまな困難感が生じ、看護師が過度の困難感を抱えることにより、ストレスやバーンアウトにつながる可能性があると考えられる。

バーンアウトは、看護師自身にとっての心身の健康問題であると同時に患者にとっても重大な問題となり、患者の満足度や医療事故に影響を及ぼすと報告されている。これらの要因を踏まえ看護職のバーンアウトの予防への取り組みがなされつつある。

認知症高齢者をケアする職員の困難感やストレスに関する研究は、介護施設に焦点を当てたものが多く、急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師のバーンアウトに関する研究は見当たらなかった。急性期病院は、介護保険施設と比較すると、医師・看護師等の人員配置や教育体制などは恵まれている。しかし、入院期間が短い中で、身体疾患の看護だけでなく、認知症高齢者へ対応することの負担などのような介護保険施設とは違った困難感があると予測され、急性期病院での認知症高齢者をケアする看護師の困難感はバーンアウトへ影響しているのではないかと考える。そのため、急性期病院に勤務する看護師が認知症高齢者を看護する中で、具体的に困難感を明らかにし、解決策を講じる必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、急性期病院で看護師が認知症高齢者を看護する中での困難感尺度を開発し、この困難感がバーンアウトへ及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

【研究 : 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感】

関東甲信越にある5つの200床以上の国公立系医療機関で急性期病院のうち認知症看護を実践している看護師115名に「認知症高齢者をケアする看護師の困難感」について質問紙調査による質的研究を実施した。意味内容の類似したものについてまとめ、博士号取得の看護学研究者よりスーパーバイズを受けてカテゴリー化した。

【研究 : 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感尺度の開発】

質的先行研究(研究)と文献研究に基づき、急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感尺度:Nurses' difficulties in dementia care scale(以下、NDDC尺度)原案27項目を作成した。全国の200床以上の国公立系医療機関で急性期病院のうち、同意が得られた6病院で認知症高齢者が入院している病棟の看護師703名を対象に質問紙調査を実施し、妥当性と信頼性を検証した。

【研究 : 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感がバーンアウトに与える影響】

調査対象は、全国の200床以上の国公立系医療機関で急性期病院のうち、同意が得られた14病院で認知症高齢者が入院している病棟で勤務する看護師2032名を対象とし、自記式質問紙調査による横断研究を実施した。質問項目は、日本版Maslach Burnout Inventory Human Services Survey22項目を目的変数とし、NDDC尺度16項目、WLB尺度24項目、個人要因17項目、環境要因8項目を説明変数とした。分析方法は、1)本研究の対象者の特性を記述統計、2)2変量解析、3)多変量解析、4)急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師のバーンアウトの影響要因を明らかにするため、重回帰分析で最終選択された変数を観測変数として、因果モデルを作成し共分散構造分析にて適合度を検証しながら、因果モデルの改良を行った。

4. 研究成果

【研究】

1. 対象の特性

4施設の急性期病院に勤務する看護師115名中、困難感についての経験を一つでも記入してあるものを有効回答とした。分析の対象は105名(91.3%)で女性99名、男性6名であり、平均年齢34.4歳、平均経験年数は10.4年、認知症看護年数7.4年、既婚35名、未婚70名、子ども有り25名、なし80名、スタッフ94名、主任7名、師長4名、認知症認定看護師は0であった。また、1か月間に認知症高齢者をケアしている件数は、3~25名であった。

2. 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感

分析の結果、69の文脈が得られ3のカテゴリー、11のサブカテゴリーが得られた。カテゴリーは《認知症の症状に関連する困難》、《看護師としての職責に対する葛藤》、《認知症専科でない病棟に起因する困難》の3つに分類された。

認知症の症状に関連する困難は、「私は患者にドレーン・チューブ類、点滴を抜去されるのが負担である」などが含まれる。安全な医療提供に対する困難感、「患者に何度も同じことをくり

返し説明することは負担である」などが含まれる 意思疎通困難 , 「攻撃的な態度をとる患者に対しては怖いと感じる」などが含まれる 暴力・暴言に対する困難感 , 「患者に何度もナースコールで呼ばれ, 対応するのが辛い」などが含まれる 認知症独特の対応に関する困難感 から構成された .

看護師としての職責に対する葛藤は, 「抑制を外して欲しいという患者の欲求に応えることができなくて辛い」などが含まれる 抑制することへのジレンマ , 「正確に訴えることができない患者の状態をアセスメントできているか自信がない」などが含まれる 認知症についての理解不足 , 「患者に同じ事を何回も繰り返され, 返事がめんどくさいと思う」などが含まれる 否定的な感情 , 「医師や他職種との連携がうまくいかない」などが含まれる 他職種の協力 , 「家族の協力が得られない場合は退院支援が負担である」などが含まれる 家族からの応じられない要望 から構成された .

認知症専科ではない病棟に起因する困難は, 「重症患者と一緒に介護度が高い患者を多く受け持つ場合には負担を感じる」などが含まれる 仕事の過重負担 , 「認知症患者が大声を出すことで, 他の患者へ迷惑をかけて困る」などが含まれる 他の入院患者への支障 から構成された .

【研究】

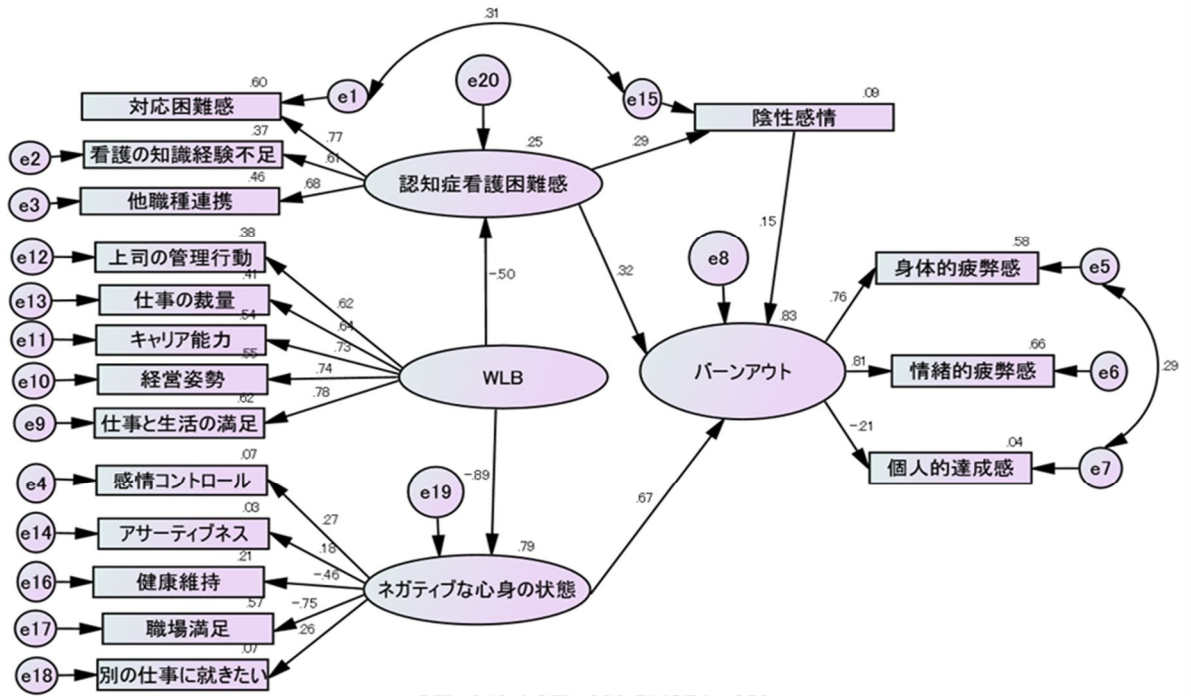
有効回答 567 名 (82.2%) を分析対象とした . 探索的因子分析を最尤法, プロマックス回転で実施し, 16 項目 3 因子 (認知症高齢者への対応困難感, 認知症看護の知識・経験不足の困難感, 病棟での他職種連携の困難感) が抽出され, 確証的因子分析では適合度は良好であった . 信頼係数では, クロンバック α は 0.93, 再テスト法の級内相関係数は 0.69, 基準関連妥当性の仕事ストレッサー尺度との相関係数は 0.56 であった . NDDC 尺度の信頼性・妥当性は概ね検証された .

【研究】

本研究では, 全国の 200 床以上における 14 の国公立系医療機関に勤務する看護師 2032 名を対象とした . 有効回答数は 1235 名 (60.8%) であった . 14 病院の有効回答率は, 48.6 ~ 85.0% であったが, 病院間のバーンアウト総合得点平均に有意差はなかった . 従って, 本研究の結果は, 母集団である全ての国公立系医療機関に勤務する認知症高齢者をケアする看護師を反映していると考えられる . 14 病院のバーンアウト総合得点平均は 11.8 ~ 13.1 点であったが有意差はなかった . 重回帰分析の結果, 因果モデルへの投入変数として, 認知症看護困難感, WLB, 自分の健康を維持できる, 職場満足, 患者のわがままや過度な訴えに対して看護師がもつ陰性感情, 転職希望 (全く別の仕事に就きたい), アサーティブネス (他者への配慮優先の率直でない非主張的自己表現), 感情コントロール (かつとなって物を壊したくなる時がある) の 8 項目が選択された . 選択された 8 項目を観測変数として, バーンアウト因果モデルを作成し, 共分散構造分析にて適合度を検証した . 適合度は, GFI=0.918, AGFI=0.888, RMSEA=0.073 であり, パス係数は全て有意であった . 『認知症看護困難感』はバーンアウトに直接的に影響し, 「陰性感情」を介して間接的にも影響していた . 「感情コントロール」「アサーティブネス」「別の仕事に就きたい」「健康維持」「職場満足」が『ネガティブな心身の状態』という潜在変数を示し, バーンアウトへ直接影響していた . 『WLB』は, 『認知症看護困難感』または『ネガティブな心身の状態』を介して, バーンアウトへ間接的に影響していた .

因果モデルの適合度は採択基準を満たし, 認知症高齢者をケアする看護師の困難感のバーンアウトへの影響を説明できると考える . 急性期病院で認知症看護の困難感を持っている者は, 陰性感情を持ちやすく, バーンアウトしやすいことが明らかになった . バーンアウトを予防するために, 認知症対応力向上の研修の工夫, 多職種連携の強化, 看護師間での困難の共有やメンタルサポート体制の構築が望まれる .

以下, 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感のバーンアウトモデルを示す .



GFI=.918 AGFI=.888 RMSEA=.073

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川村晴美、鈴木英子、中澤沙織	4. 巻 27(3)
2. 論文標題 わが国における急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感に関する文献レビュー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本健康医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 251-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川村晴美、鈴木英子、田辺幸子、中澤沙織	4. 巻 40
2. 論文標題 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感尺度の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 312 321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.40.312	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川村晴美、三村洋美、依積田ゆかり	4. 巻 80(6)
2. 論文標題 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 昭和学会誌	6. 最初と最後の頁 491 498
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川村晴美、鈴木英子、中澤沙織、田辺幸子
2. 発表標題 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感
3. 学会等名 日本健康医学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤沙織、鈴木英子、川村晴美、田辺幸子
2. 発表標題 新卒看護師が認識する実地指導者のサポート評価尺度の開発及び信頼性・妥当性の検証
3. 学会等名 日本健康医学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田辺幸子、鈴木英子、中澤沙織、川村晴美
2. 発表標題 看護学生の領域別看護学実習への不安と基礎看護学実習の経験の認識との関連
3. 学会等名 日本健康医学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川村晴美、鈴木英子、依積田ゆかり
2. 発表標題 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感尺度の開発
3. 学会等名 日本看護管理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川村晴美、鈴木英子、中澤沙織、田辺幸子
2. 発表標題 急性期病院で認知症高齢者をケアする看護師の困難感とバーンアウトとの関連
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Harumi kawamura, Saori Nakazawa, Sachiko Tanabe
2. 発表標題 Influence of nurses' difficulties in dementia care in acute care hospitals on burnout
3. 学会等名 24 th EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 英子 (Eiko Suzuki) (20299879)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究所・教授 (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------